

複言語・複文化環境のもとでの漢字語彙教育の実態 -マカオ地域を事例に-

吉 甜 (筑波大学)

1. プロジェクトの背景

日本語教育において、漢字語彙の習得は重要な課題の一つである。中国語母語話者は、豊富な漢字知識を有しているにもかかわらず、日本語の漢字語彙が必ずしも容易ではないことが指摘されている(三国ほか2015、李刊行予定)。筆者のこれまでの研究においても、中国の学習者が頻繁に漢字語彙を検索している実態が明らかとなっており、漢字語彙習得の困難さが示されている(吉2024)。

とりわけ、香港・マカオのような複言語・複文化地域では、繁体字の運用を基本としつつ、簡体字圏に接する環境に加え、普通話、広東語、英語、さらにはポルトガル語が併用されている。このような多様な言語環境の中で、学習者がより複雑な漢字環境に置かれているため、日本語学習者の漢字語彙習得の様相は一層複雑化していると考えられる。

こうした背景のもと、複数の漢字文化が交錯する環境において、学習者がどのように漢字語彙を学び、どのような困難に直面しているのか、またどのような指導が求められているのかを明らかにする必要性を感じ、本プロジェクトを実施した。

2. 本プロジェクトの目的

本プロジェクトは、複言語・複文化環境における日本語学習者の漢字語彙教育の実態を明らかにすることを目的として実施した。対象地域として香港・マカオを想定したが、その中でも、ポルトガル語も使用されるなど、より複雑な言語環境にあるマカオ地域を取り上げた。

漢字語彙教育の実態について、書き方・読み方・使い方という3つの観点から、教師側の教授実態と学習者側の学習実態を調査し、複言語・複文化環境における課題を明らかにするとともに、教育実践への示唆を得ることを目指した。

3. プロジェクトの概要

3-1 プロジェクト全体のスケジュール

本プロジェクトは、事前準備、現地活動、分析・まとめの3段階で進められた(表1)。

表1 プロジェクト全体のスケジュール

事前準備	2025年4月~2025年8月
現地活動	2025年9月
分析・まとめ	2025年10月~2026年2月

事前準備では、現地協力者と定期的に打ち合わせを行い、調査設計や活動内容の検討を進めた。

現地活動は9月初旬に実施したが、現地では本プロジェクトへの関心が高く、インタビュー希望者が当初の予定を上回った。そのため、滞在期間中にすべてのインタビューを実施することができず、一部については帰国後にオンラインで補足的に実施した。

分析・まとめでは、収集したデータの整理と考察を行い、成果のとりまとめを行った。

3-2 渡航中のスケジュール

2025年8月31日から9月5日にかけてマカオに滞在し、以下の活動を行った。授業観察やインタビューは日程を分散させ、学習者や教師の負担に配慮しながら進めた。

- ・2025年8月31日
マカオへ渡航
- ・2025年9月1日~9月2日
授業観察、インタビュー
- ・2025年9月3日
交流活動の実施、インタビュー
- ・2025年9月4日
授業観察、インタビュー
- ・2025年9月5日
帰国

3-3 現地での活動内容

現地において、以下の4つの活動を実施した。

① アンケート調査

学習者91名を対象に、漢字語彙の書き方・読み方・使い方に関する学習実態と困難に感じる点について調査を行った。

② 授業観察

総合日本語の授業を3コマ観察し、授業における指導と学習過程の実態を把握した。

③ インタビュー実施

マカオ大学を訪問し、日本語教師3名および学習者15名に対してインタビューを行った(図1)。教師側と学習者側双方の視点から、学習上の課題とニーズについて詳しく聞き取った。

④ 交流活動の開催

学習者同士が効果的な学習方法について意見交換を行う場を設けた(図2)。



図1 マカオ大学への訪問



図2 交流活動の一部の様子

なお、活動の周知にあたっては、事前と滞在中に本プロジェクトのチラシ(図3)を配布した。



図3 本プロジェクトのチラシ

4. プロジェクトを通して得られた成果

本プロジェクトを通して、漢字語彙学習に関する3点の重要な知見が得られた。

第一に、書き方に関しては、学習者が字形の違いに気づく契機が必要であることが明らかになった。マカオ地域では主に繁体字が使用されているが、日本語の漢字とは字形が異なる場合がある。また、簡体字圏で教育を受けた後にマカオで学ぶ学習者にとっては、簡体字に加え、日本語の漢字と繁体字の双方を区別して習得する必要がある。しかし、学習者へのインタビューでは、日本語学習の初期段階では字体の相違に気づかず、小テストで減点されたことをきっかけに初めてその違いを認識したという声が聞かれた。「日本語の漢字には簡体字と同じ字形のものもあれば、繁体字と同じ字形のものもあり、どの場面でどの字形を用いるべきかの判断が難しい」といった発言も見られた。また、教師へのインタビューからは、異なる字体が混在する場合の評価基準について配慮が必要であるとの指摘があった。

第二に、読み方に関して、学習者にとって最も難しいのは「一字多読」であることが明らかになった。アンケート調査では、「読法不明」「一字多

読」「同音異字」「アクセント」など複数の項目が挙げられたが、その中で最も多く選択されたのが「一字多読」であった。学習者へのインタビューにおいても、「一つの漢字には複数の読みがあり、その規則は積み重ねによって身につける必要がある」といった発言が見られた。

第三に、使い方に関しては、コロケーションの習得が大きな課題であることが明らかになった。学習歴3年以上でJLPTのN1対策中の学習者は、「日本語の作文授業やN1対策を進める中で、漢字語彙の使い方、特にコロケーションが難しいと感じている」と述べている。また、教師へのインタビューでは、学習者の作文において「自信を栽培する」「お金を取る」といった母語の影響による不自然な表現が見られることが指摘された。そのため授業では、「自信を育てる」「お金を下ろす/引き出す」⁽¹⁾など、自然なコロケーションの習得に重点を置いた指導が行われている。

さらに、繁体字背景と簡体字背景という文字背景の違いによって、困難と感じる項目や学習上の課題に差異が見られることが明らかになった。

なお、本プロジェクトの成果の一部は、国際日本語教育・日本研究シンポジウム（第14回）および第22回日本語コミュニケーション研究会に

謝辞

本プロジェクトは、2025年度公益社団法人日本語教育学会「日本語教育グローバル人材奨励プログラム」と科研費25K16325（代表：吉甜）による助成を受けている。本プロジェクトの実施にご協力いただいたマカオ大学の李羽喆先生、ご協力いただいた先生と学生に深く感謝申し上げます。

注

(1) 「自信を栽培する」「お金を取る」「自信を育てる」「興味を引き出す」といった例は、インタビューに協力した教師が授業で使用している資料に基づくものである。なお、著作権等への配慮から、当該資料の写真の掲載は控える。

参考文献

- (1) 吉甜 (2024) 「第9章 なぜ中国語話者は漢語を検索するのか」 石黒圭・吉甜・佐野彩子 (編) 『スマホは辞書になりうるか 日本語学習者の辞書引きの困難点と指導法』 明治書院, 171~190.
- (2) 原隆幸 (2015) 「香港とマカオにおける言語教育—旧宗主国の違いは言語格差をもたらすのか」 『言語と格差—差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』 明石書店, 211~228.
- (3) 三国純子・小森和子・徐一平 (2015) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語連語の習得: 共起語の違いが誤文訂正に及ぼす影響」 『中国語話者のための日本語教育研究』 6, 34-49.
- (4) 李羽喆 (刊行予定) 『日本語教育における自己表現のための語彙学習—理論・実態・実践—』 ひつじ書房.

において発表した。

5. 今後に向けて

本プロジェクトでは、複言語・複文化環境における日本語教育の課題を具体的に把握することができた。授業観察、学習者によるアンケート、日本語教師と学習者へのインタビューを通して、漢字語彙の書き方・読み方・使い方に関する困難点を明らかにするとともに、学習者の背景に配慮した日本語教育の重要性を再認識することができた。このことから、漢字圏学習者を一括りに捉えるのではなく、背景に応じた指導が必要であることが示唆される。

また、現地の日本語教師や学習者との交流を通して、現地の日本語教育の実態や学習者の多様な背景について理解を深めることができた。特に、学習者が複数の言語や文字体系の間で試行錯誤しながら日本語を学んでいる姿は印象的であり、自身の研究を見直す重要な契機となった。

今後は、こうした知見をもとに、より効果的な指導方法の検討を進め、漢字語彙教育のさらなる発展を図っていきたい。